

# 1957年と1958年の山本一清手帖について

坂井 義人

## 1、はじめに

1959年(昭和34年)1月16日、山本一清博士はその人生を閉じられた。筆者はこの最晩年にいたる二年間について、特に京都大学天文台アーカイブ研究会発表(通称・山本研究)とその集録所載及びIP図書KURENAI(紅)にて、諸事跡を明らかとしてきた。これらは、手元に残された亡父・坂井義雄(または誉志男・岐阜金華山天文台、私設・斐太彦天文処その他)資料類と、大学・益川記念館所蔵の山本一清博士遺品資料類を駆使しての山本事跡発掘の結果として、報告を為してきたものであった。(山本博士を以下は山本師と記述する)今回は、その系譜資料として、備忘録的手帖二年分その他の存在を示し、以上の事跡検証の補完として、以下を簡略ではあるが紹介したいと思う。



写真1、1957年山本手帖  
(資料 No 2-E24-75)

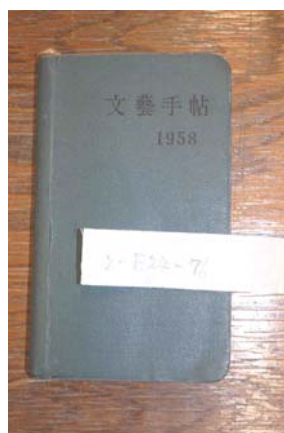


写真2、1958年山本手帖  
(資料 No 2-E-24-76)

写真1は1957年・昭和32年、そして写真2は昭和33年の「文藝手帖」(文芸春秋新社・頒価100円)二冊である。いわゆるポケット版として山本師は何時も持ち歩かれたものと考えられ、その中身内容は予定表と備忘録的記述に満ちた内容となっている。晩年の二年を記録する内容としては、山本師生涯の最重要記録の原資料の一つと言って差し支えないであろう。ここでは、その全ての集録化と紹介は不能として、凡そのその二年を綴った内容の傾向について論考を試みる事とした。また特に博士晩年の二年を賭した、いわゆる三五教団(アナナイ教団)との関係推移、またその他の関連資料類との相互関係も照会しつつ、時間的推移と特徴を僅かながらでも明らかとしたい。なお、写真の付箋ナンバーは教室の富田良雄氏作業による資料整理閲覧番号を表し、その他の資料類としては、この他にも生涯に亘る多くの同様の手帖類も残されている事を報告する。

(@ 手帖二冊、見舞い受け覚え、アナナイ書簡は京都大学宇宙物理教室帰属所有資料)

## 2、1957年・昭和32年の手帖内容について

まず、1957年・昭和32年3月の記述内容をその事例として紹介したい。この月は事例写真のように、忙しく目まぐるしい日々であった事が伺われる。記述された内容としては、それほど量には感じられないが、一ヶ所大変に興味深い数文字が書かれている。即ち「3月18日の10:」という記述である。香貫山地鎮祭と書かれた一行であるが、これが山本師晩年に精魂を込めて指導した、「アナナイ教・香貫山天文台」(後に中央天文台、また月光天文台とも改称)の始まりを意味する表記である。実

は、このページは3月の活動を綴ったものであるが、山本師は手帖の切り替わる前年の12月より手帖を使い始めていて、これは毎年恒例の様子で、即ち1956年・昭和31年の年末の様相とも相関を評価することも可能である。その関係か、前年度手帳の年末一ヶ月には記述が少なく、いつも早めに12月に入ってから手帳を使い始めたことを想像させる。山本師の性格気概の一端のようにも思える。このような紹介をしつつ、アナナイ教団との記述内容を主体として以下に詳述紹介する。なおここからは、その時々々の居所は理解困難たるをお断りしておく。

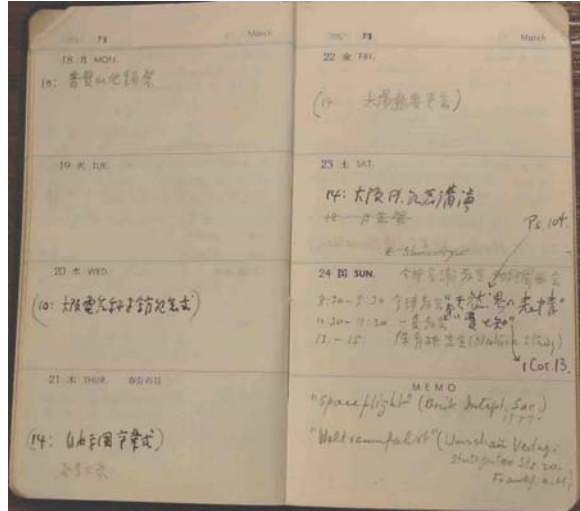


写真3 1957年3月中旬以降の記載事例・特に3月18日記述が興味深い

(1) 1956年・昭和31年12月の記入内容

- ・12月7日(土) 根上 村井 両氏入洛 (アナナイ教団運営責任者・坂井注)
- ・12月8日(日) 開祖入洛 8:10 (アナナイ教・中野與之助開祖・坂井注)
- ・MEMO ` 霊界からの宇宙 ` (開祖著作本名と思われる・坂井注)
- ・12月20日(木) PM18:19 原田三夫氏来館(来館とは教団施設の事か・坂井注)  
 @ 原田三夫氏は、当時の青少年科学啓蒙に活躍し作家活動を展開した人物
- ・12月24日(月) 木負(きしょう) 敷地調所裁判(沼津市木負・当時から教団VIP接待施設として機能し現在も継続。なお、調所は調書の意味と思われ裁判係争の意味?)
- ・12月28日(金) アナナイ棟領(棟梁) 来宅(4人) 三人泊
- ・12月29日(土) 沼津へ書約5箱積み出し(山本宅より書籍移動と思われる・坂井注)

(2) 1957年・昭和32年1月の記入内容

- ・1月 5日(土) 研究所奉告祭
- ・1月 6日(日) 出発 沼津へ 香貫山 牛臥山 14:00 木負へ(船で)
- ・1月 7日(月) 暦算局研究開始(アナナイ研究施設、当初は沼津市木負・坂井注)
- ・1月 12日(月) OAA 静岡支部会 OAA 名古屋支部会(人工衛星)
- ・1月 16日(水) 村井氏沼津着(アナナイ責任担当者・坂井注)

(3) 1957年・昭和32年2月の記入内容

- ・2月10日(日) 18:50 開祖を久留米駅で送る(アナナイ開祖・中野與之助師・坂井注)
- ・2月12日(火) Kurume Isahaya
- ・2月13日(水) Oita

- ・ 2月14日 (木) Oita Miyazaki
- ・ 2月15日 (金) Miyazaki Nakatu
- ・ 2月16日 (土) Nakatu Hiroshima
- ・ 2月19日 (火) 帰清(教団本部所在地・清水市本部帰着・坂井注)
- ・ 2月21日 (木) 英子帰清(ご令室・英子様・坂井注)
- ・ 2月23日 (土) 月並祭(月次祭)・・・[ 生と死 ] と記載有り・坂井注

@ 2月は、前半より後半まで、アナナイ教団の巡教に同行して、九州各地にご令室・英子夫人同伴にて訪問を実施した模様。なお地名は手帖の全般ローマ字表記として記されている。各地では教団関係及びその他で、講演等を実施した模様。

- ・ 2月29日 (水) GIFU (坂井義雄先導にて、アナナイ支部天文関係視察?・坂井注)

(4) 1957年・昭和32年3月の記入内容

- ・ 3月8日 (金) 徳島
- ・ 3月11日 (月) Kochi Uwajima (四国訪問)
- ・ 3月16日 (土) Osaka 人工衛星諸問題
- ・ 3月18日 (月) 香貫山地鎮祭(天文台施設・坂井注)
- ・ 3月26日 (火) Moskuwa 放送(ソ連 Planetarium)

(5) 1957年・昭和32年4月の記入内容

- ・ 4月7日 (日) 椋平氏去る(地震・椋平虹として注目を集めた人物と推定・坂井注)
- ・ 4月13日 (土) 関勉 古川騏 来清(古川騏一郎氏のちに国立天文台・坂井注)
- ・ 4月15日 (月) 香貫山へ
- ・ 4月16日 (火) 彗星 Arend-Roland 搜索(観測)
- ・ 4月17日 (水) 五藤夫妻来清(五藤光学設立者の清水教団本部訪問・坂井注)
- ・ 4月18日 (木) 香貫山へ(五藤氏と)
- ・ 4月18日 (木) 観測開始祈願式
- ・ 4月19日 (金) 開祖出発(四国 九州へ)
- ・ 4月23日 (火) 月並(月次)祭講話

(6) 1957年・昭和32年5月の記入内容

- ・ 5月 3日 (金) 「人工衛星の時代来る」の記載(スプートニク1号1957年10月4日打ち上げ成功・坂井注)
- ・ 5月11日 (土) 人工衛星全国委員会
- ・ 5月21日 (火) 香貫山上棟式(アナナイ中央天文台・坂井注)
- ・ 5月27日 (月) 神田茂氏来訪

(7) 1957年・昭和32年6月の記入内容

- ・ 6月2日 (日) 小森幸正氏来訪す
- ・ 6月10日 (月) 近江漏刻祭(近江神宮祭事・坂井注)
- ・ 6月30日 (日) MEMO 欄氏名覚書  
古賀 水野 伊達 三沢 古川 大場夫人 草場 井上 村上  
西岡 スコフィールド 近藤 岡林 小山(著名天文関係者名・坂井注)

(8) 1957年・昭和32年7月の記入内容

- ・7月 1日(日) 大沢君来泊(土星表面の Oosawa 斑点観測発見・火星観測者・坂井注)
- ・7月 28日(日) 三谷氏来訪(泊)

(9) 1957年・昭和32年8月の記入内容

- ・14時 登山(香貫山と推量・坂井注)
- ・岐阜で衛星球(岐阜金華山天文台にて模擬人工衛星視認実験実施・坂井注)  
表面高反射率の人工球を作成し、岐阜市より西の伊吹山頂上に運搬設置して、岐阜金華山天文台より、擬似スプートニック衛星の視認可能性を検証した実験。これには地元岐阜市のアマチュア無線団体(代表 鈴木幸重氏コールサイン・JA2HJ)、及び岐阜山岳会の全面協力により実施された全国的にも稀有なる活動として注目された。

(10) 1957年・昭和32年9月の記入内容

- ・9月 7日(土) 登山 塗装開始食堂棟式(アナナイ中央天文台食堂・坂井注)  
坂井氏帰清(亡父・坂井義雄清水市教団本部に戻る・坂井注)
- ・9月 13日(金) 福井実信氏来訪(月面スケッチ観測者・坂井注)  
坂井氏と話す
- ・9月 17日(火) 6:50 西村繁同車 登山(望遠鏡メーカー・西村繁次郎社主・坂井注)
- ・9月 18日(水) 在清
- ・9月 26日(木) 沼津市医師会講演  
@ なお、香貫山中央天文台(月光天文台)の落成完成祭は9月2日、なぜか手帖記載は無く、貸与46センチカルヴァー望遠鏡移設の記載も無い。

(11) 1957年・昭和32年10月の記入内容

- ・10月 10日(木) 太陽熱委員会
- ・10月 12日(土) 19:00 人工衛星講演(山本 長谷川) 本部(アナナイ教本部講演・坂井注)
- ・10月 13日(日) 人工衛星講演(中央天文台と推量・坂井注)
- ・10月 31日(木) 野尻氏「暦と人生」17:00 野尻氏去  
@ 野尻抱影著「星三百六十五夜」P.341 記載・記事名「教祖様」として紹介

(12) 1957年・昭和32年11月の記入内容

- ・11月 1日(金) 村井 坂井 帰清

(13) 1957年・昭和32年12月の記入内容

- ・12月 14日(木) 坂井氏来桐(滋賀県上田上桐生・山本天文台・坂井注)
- ・12月 15日下段の記述欄 MEMO の内容
  - 1) 宇宙時代の性格(科学上)
  - 2) 宇宙時代の性格(思想上)
  - 3) 宗教の占める位置
  - 4) 人間のあり方
  - 5) 現代の宗教界の任務
 @ 上記の5項目の記述は、これ以上の説明は無い。しかしこの時期の山本師の問題提起と方向性及び心情を物語るものとして、重要なキーワードと捉えるべきであろう。科学と宗教の狭間に立とうとした先進的な山本師のテーマとして今後も着目する必要性がある。

(14) 手帖の末尾記入内容

・英文での記載(書名、その他の交友的な覚え書、全ての理解困難)、住所録

・Ananai Group (アナナイ系の人工衛星観測サイト名の列記)

清水 沼津(中央天文台 天守閣) 暦算局(鳳凰堂) 牧ノ原

九州道場(金閣) 岐阜道場(夢殿)

四国 二又 福島 北信 南信 遠州 都城 関東

@ 山本師にとっては、重要な教団天文拠点は著名文化財に擬えての認識が伺える。また地名のみの八箇所のサイトも人工衛星観測拠点と捉えて、合計 13 ヶ所に及ぶ観測地点と認識していたらしい。ただし、その大半はアナナイ教徒を動員しての天文学啓蒙にも繋げようとした事例でもあろう。その後こうした拠点には、山本師逝去の後にもアナナイ系の天文観測施設が建設され続けた。(京都大学 IP リポジトリ天文台アーカイブ各年度集録にて公開)

### 3、1958 年・昭和 33 年の手帖内容について

1958 年・昭和 33 年の山本手帖の特徴は、あまりにも記述内容が前年度に比して、量的には少ない事であろう。8 月に至るまでは、かなりの記述が見られるが、特に 10 月以降は備忘的な予定のみで、会誌「天界」の校正などの義務的なものが散見される程度である。前年の精力的な行動は、今は昔といった印象である。理由としては、既に病魔の発現と、アナナイ教団との隙間風が吹きはじめた頃の事であり、失意の半年であったとも解される。特筆されるは、初冬にはほぼ絶縁的状态に両者は陥るのであるが、そのあたりの事は一切手帖には書かれてはいない。山本師が教団との意思の乖離の末に、滋賀県のご自宅天文台に戻られたのは、11 月 1 日との教団関係者の証言も存在する。そしてその二ヶ月半後の 1959 年・昭和 34 年 1 月 16 日に山本師は逝去されていった。亡父・坂井義雄には、「坂井君・・・何れ教団は迎えに来るよ・・・」と語られたとも聞くが、それらは夢殿に奉られる結果となったのだった。



写真 4 1958 年 4 月の記載事例(出張予定)



写真 5 1958 年 10 月の記載事例(記載少)

#### (1) 1958 年・昭和 33 年 1 月の記入内容

- ・ 1 月 11 日(火) 1 月 12 日(水) 病臥
- ・ 1 月 12 日(水) 下段の MEMO 欄

三五教天文大会(10 日頃) 人工衛星全国大会(下旬) 中央天文台講演会(15 日)

#### (2) 1958 年・昭和 33 年 4 月の記入内容

- ・ 4 月 8 日(火)頃より 5 月 3 日(火) 帰桐(九州遊歴・講演後に桐生の自宅へ帰宅。  
詳細は割愛・・・坂井注)

#### (3) 1958 年・昭和 33 年 6 月の記入内容

・ Oumi 神宮へ

(4)1958 年・昭和 33 年 10 月の記述内容

・ 10 月 11 日(土) 坂井氏(岐阜) 来宅 長谷川氏(神戸) 来宅

(5)1958 年・昭和 33 年 11 月の記入内容

・ 11 月 27 日(木) 皇太子妃発表

(6)1958 年・昭和 33 年 12 月の記入内容

・ 12 月 6 日(土) 村上氏 来宅(村上忠敬氏・・見舞いと思われる)

・ 12 月 27 日(土) 15h 小松 杉江 両医来診

#### 4、その他の資料紹介

(1) アナナイ教団責任役員よりの書簡について

1958 年 11 月 1 日、アナナイ教団の天文方針と意見相違にて、山本師は関係決別の意思を示した。相当なる激論があったと聞く。そして滋賀県帰郷後、新旧の教団信徒責任代表役員二名より、それぞれ 12 月 29 日及び新年早々 1 月 6 日付返信書簡が届いている。29 日付は現職の立場として、ほぼ教団側も抗議と解消の意思を示し、後者は前代表として山本師に対する気遣いと慰留的内容を届けている。後者の根上氏は弁護士を生業とし、深い洞察力と今後の和解を目指す如くの意思表示となっている。これらについては、今後の再検討と証言も必要とするところから、今回はこれ以上の言及は避け再検証に譲る。因みに慰留的書簡の十日後、山本師は生を終えられた。果たしてこれら書簡を読まれたか否かについては、(開封はされているが) 何とも言い難い。

(2) 表題「見舞 受け覚え 昭和 33 年 12 月 27 日 山本一清」ノートについて

山本師最後の日記的記録と思しき B5 版サイズのノートが残されている。かかる自筆帳が存在することは、この内容を見て筆者は大変なる驚きを覚えた。日付は昭和 33 年師走末の 12 月 27 日付けとなっており、何とこれは山本師逝去の僅か 20 日前のものである事でもあった。上記表題の如く、単なる病氣見舞い覚え程度の自筆書であり、訪問者記録くらいとしか見えなかったからである。僅か 5 ページの記載であり、確かに 1~2 ページは、訪問者と見舞い品の記録ではあった。ところが 3 ページ目以降は、今まで誰も想像駄にしない病魔の分析と山本師の自己評価が述べられてある。特に主治医の一人、小松博士との記載のある最後の数行を以下に示す事とする。因みにこの事は、二つの意味を内包することであった。その自筆内容の重要性をここに評価しておきたい。

一言で言えば、山本師は相当正確なる病状を生前から把握していた事となり、今般のノートはそれを裏付けた。この当時既に「ガン告知」というテーマが扱われた事に驚きを感じず。そして、このノートそのものが、山本師最後の自筆記録であつたらうとも想像される。それが以下の小松医師意見を要約したものであろう。まさに絶筆とも言って良い。ご自身の病魔を記載した事は、村医者でもあつた祖先の血脈とも言えよう。

- ・ 小松医師との用談を要約した下記文章は、既に存命中の山本師には病魔の告知がなされており、胃癌と肝臓にも転移をご自身は理解されていた。そして既にその覚悟の程もこの短文には伺われる。なお、先行 2 ページの詳細記載も含まれる。
- ・ 東亜天文学会・天界誌第 407 号(1959 年 3 月 4 月合併号)、P.107 村上忠敬氏追悼文中に「先生はおそらく 2 年位前から胃ガンであつたのを御存知なく、これが最近肝臓ガンに転移したもの

だとのことであった」と記載されている。

小松 博士

ガンが胃部有り肝臓にまでひろがりありおそらくよほど以前より発病してゐたものと思ふ 外科的の療法としても胃との患部を取りのぞき肝臓の部分そのままにもしておくこと云う事も出来ず 結極(局)のところ外科的の治療をほどこす事は無意味な事になり今となつては手のほどこし様もなくこの祭一際の仕事より手を引き安静を保ち營養(栄養)を取るより致し方もなし 人間ドックに入りて研究すると云う事も無意味なりとの意見なり (原文のまま 資料 No 4-8-14)

## 5、結語に代えて

この手帖二年分に纏わる概要等は、以上でその紹介を終える。そして 1958 年の手帳末尾ポケットには、二枚の名刺が残されていた。理学博士・山本一清の小さい紙片は、これを白木の位牌にも擬するという感慨を催す。今は時の移ろいに、ただ合掌あるのみ・・・と。



写真 6 1958 年 文藝手帖 末尾ポケットに残された名刺 ( 山本一清博士・川鯉慶治議長 )

★1959年(昭和34年)1月16日永眠 理学博士 山本一清 滋賀県草津市外山本天台★

## 参考文献

天文台アーカイブプロジェクト報告会集録(第2回～第5回)・・・KERENAI サイトにも公開

- ・第2回 集録 カルヴァー46センチ反射望遠鏡 坂井義人 2011年7月28日
- ・第3回 集録 カルヴァー46センチ望遠鏡一時帰郷の事情 坂井義人 2012年8月2日
- ・第4回 集録 K型光学系の発見と若き日の小林義生 坂井義人 2013年8月1日
- ・第5回 集録 山本一清博士の葬儀・慰霊祭について 坂井義人 2014年8月6日
- ・第5回 集録 岐阜金華山天文台の活動意義と坂井義雄 坂井義人 2014年8月6日
- ・第5回 集録 山本一清博士とあなない天文台 五味政美(月光天文台) 2014年8月6日

脱稿 2015年7月5日



## 『天文年鑑』の変遷

富田良雄

『天界』は東亜天文学会（天文同好会、東亜天文協会）の天文愛好家向けの機関誌として創立以来発行され続け、年々の天文界の動向などを会員に届ける役目をはたしてきた。東亜天文学会では『天界』のほかにも、『星』（1929-1930）、『天文年鑑』（1927-1961）、『星と空』（1952-1957）、『ブレテン』（1921-1935）などを発行してきている。なかでも『天文年鑑』はその年の天文基本情報をコンパクトにまとめ観測に直接役立つハンドブックとして、1927年以來毎年発行されてきた。1944年以降は『天文年表』と名前を変更しているが、これらをまとめて天文年鑑類と呼ぶことにする。以下、山本天文台資料中に現存する天文年鑑類をもとにして、その変遷をたどってみたのが次の表である。

名 称	発行年	編纂者	発行所
天文年鑑	1927	天文同好会	天文同好会
天文年鑑	1928-1932	天文同好会	新光社
天文年鑑	1933-1938	東亜天文協会	恒星社厚生閣
天文年鑑	1942, 1943	東亜天文協会	『天界』第 247 号、第 259 号
天文年表	1944-1948	田上天文台	恒星社厚生閣
仮天文年表	1948, 1949	田上天文台	田上天文台
日本天文年鑑	1950	東亜天文学会	日本出版社
天文仮年表	1951	田上天文台	田上天文台
天文年表	1952-1958	田上天文台	田上天文台
天文年表	1959	山本天文台	山本天文台
天文年表	1960, 1961	東亜天文学会	東亜天文学会

ハンドブックとしての『天文年鑑』は、発行所を替えつつも 1927 年から 1938 年まで発行された。1927 年創刊号は天文同好会から発行、1928 年から 1932 年までの 5 冊は新光社から、1933 年から 1938 年までは恒星社から発行された。出版社は替っても、サイズは屋外でも手持ちで使いやすい縦長（幅 10cm、高さ 21cm）で統一されていた。ページ数は 65 ページから 336 ページとばらつきがある。

ちなみに 1927 年版の創刊のことには、「天体も天文学も天文学者も所々の天文台も、皆、年々の進展を続けてある。故に天文を知らんとする者は、誰でも、此の生きた事実と接触を絶たないことが必要である。『天文年鑑』は此様な要求に応ぜんために生れたものである。しかし之れは単なる天体暦そのものではない。中に各種の図表や解説を加へた意味は、一般の天文愛好家の必携書として、其の座右を賑はし、天界への案内、理解の基礎、



智識の標準、話題の論拠、研究の素材と便宜を供給せんためである。此の意味に於いて、之れは、今まで毎月の『天界』に掲げた暦表の単なる集積では無い。今後、毎年一回刊行の筈である。」とある。単なる天体暦ではないとの自負が貫かれていて、それがプロにもアマにも使いやすいハンドブックに結実していたのである。



縦長のハンドブックとして刊行された『天文年鑑』。上段左が天文同好会版、その右5冊が新光社版、下段は恒星社版。

1939年から1941年の3カ年は、山本が京大を辞した直後で編集ができなかったのだろう、対応するものが出てこない。1942年と1943年は『天界』の新年特集号が「天文年鑑」と銘打って発行された。サイズは15cm×21cm、40ページである。翌1944年から1948年には『天文年表』と名前を変えて恒星社から発行された。サイズは天界誌と同じ、ページ数は32ページから94ページである。なお1946年版だけは表紙のデザインが異なる。



左の写真は上段は戦中に刊行された天文年鑑、下段は天文年表。右の写真は1950年の日本天文年鑑

1948年からは19cm×26cmサイズのガリ版刷りとなり、田上天文台より1961年まで発行がつづく。これらは会員配布限定で市販されたものではない。とりわけ1948年と1949年は『仮年表』と題しており、編纂途中のものと推定される。1951年はガリ版刷りではあるが『天文仮年表』としてきちんとした冊子で出版されている。ページ数は仮年表が26ペー

ジと 20 ページ、天文年表は 101 ページから 128 ページである。

1948 年は前述の恒星社版の『天文年表』と重複する。内容を比べてみると、仮年表のほうは年ごとに変る遊星暦のみからなり、これを基に星座や恒星に関する不変の表とあわせて恒星社から出版されたことが判る。1950 年だけは『日本天文年鑑』の名称で日本出版社から大判 (18cm×26cm) 87 ページのハードカバーで発行された。



戦後 1948 年から 1961 年までガリ版刷りで発行された『天文年表』

1948 年には東亜天文学会とは独立して『天文年鑑』が誠文堂新光社から商業ベースで発行されはじめ現在にいたっている。編纂は関東の天文関係者が数名であたっている。この時点で『天文年鑑』の商標を誠文堂新光社にゆずったのではないかと思われるが、その事情を語る書類は見つかっていない。山本天文台資料中には 1950 年版からの誠文堂新光社版の天文年鑑が蔵されている。

山本が亡くなった後 1959 年から 1961 年にかけては、それぞれ山本天文台編纂、東亜天文学会編纂として発行されたが、1962 年以降は発行中止となった。誠文堂新光社版『天文年鑑』がひろく普及するようになり、多くの天文愛好家がそちらを手にするようになった影響もあろう。最近では、PC 用やスマートフォン用のすぐれた天文アプリケーションソフトの利用者が増えハンドブックにとり替わりつつある。

(2015 年 7 月記)

## 徳川吉宗の大望遠鏡と山本一清

富田良雄

2013年9月にNHK BSプレミアムのコズミックフロントで放送された「天文将軍徳川吉宗」という番組に私も制作協力をした。その中で長崎市の橋本家が所蔵されている立派な遠眼鏡が、八代将軍徳川吉宗（在位1716-1745）が長崎の御用眼鏡師森仁左衛門正勝（1673-1754）に作らせた望遠鏡だろうということで紹介された。番組収録とあわせて中村士氏とこの望遠鏡の調査を行った。保管時の縮めた状態で筒の長さは85cm、外径は10cmである。5段の筒を伸ばした状態では全長約350cmとなる。接眼部には森の銘がある。この望遠鏡は現所蔵者の先々代が戦後のある時期に関西の骨董商から入手されたもので、箱書きなどの情報が失われてしまっているとのこと。番組では、吉宗が江戸城内に天文台を作って天体観測をしたことを新たに発見された資料に基づき実証的に紹介するとともに、幕政改革の理想から改暦をめざすなど英邁な将軍像を明らかにしている。

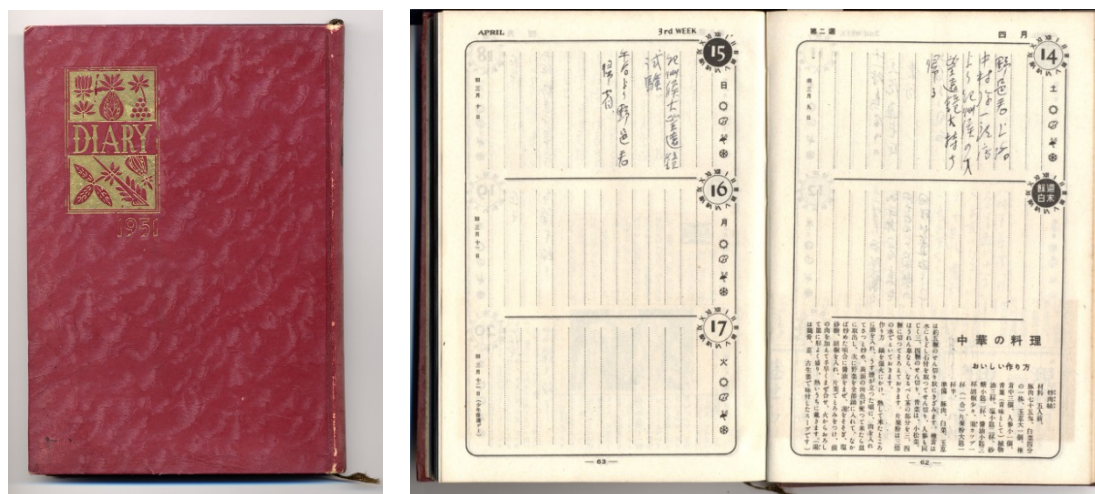


番組収録中の光景（2012年8月、長崎県立歴史博物館）と製作中の撮影用復元望遠鏡（西村製作所）

ところが最近、山本一清（初代花山天文台長）の日記を調べていて1951年4月14日の頁に「野邑君上洛。中村弥一郎店より紀州侯の大望遠鏡を持ち帰る」とあり、翌15日には「紀州侯大望遠鏡試験。午后より野邑君帰省」としてされていることに気づいた。野邑君とは当時田上天文台の助手を勤めていた野邑俊彦氏である。紀州侯は徳川吉宗のことである。おそらく山本の依頼で野邑が天界誌の印刷等の所用で京都に行ったおりに、印刷屋の近所にあった骨董商から預かって田上天文台に持ち帰ったものと読める。山本は1937年には国友藤兵衛が製作した国産初の反射望遠鏡の調査を中村要と行い、『天界』誌や国際科学史学会機関誌 *ISIS* などに論文を掲載している。その後も井本進とともに岩橋善兵衛の遠眼鏡の調査を行い、日本の望遠鏡史の分野では第一人者となっており、大望遠鏡を入手した京都の骨董商が山本に鑑定を依頼したものと推測される。野邑氏は健在で大津市にお住まいとのこと、長崎の望遠鏡の写真と同封し記憶と同じものかどうか尋ねる手紙を差し上げたが、残念ながら60数年前の記憶はほとんど薄れてしまって覚えていないと返事をいた



だいた。山本がかつてそれを調査したということの証言が得られなかったのは残念であるが、日記の記述は吉宗の望遠鏡が 1951 年ころに京都の骨董商にあったことを示している。日記の前後にはこの望遠鏡についての記載は無いが、前日の 4 月 13 日に京都の病院に入院していた長男をたずねて上洛したことが記されており、このおりに中村商店を訪問した可能性もある。残されているアルバムなどにもこの望遠鏡の写真は見つかっていない。中村弥一郎なる人物については知り合いの骨董商に依頼して現在調査中である。またこれほどの望遠鏡を、ふらっと訪ねてきた青年に託すはずはなく、事前に手紙のやりとりがあったものと考えられるので山本天文台資料の中にある手紙類の調査も今後必要となる。



山本一清の 1951 年日記と 4 月 14 日、15 日の記事（資料番号：2-E24-29）

ふしぎな縁はつづくもので、筆者の妹が趣味で通っている一閑張の師匠尾上瑞宝氏に NHK の番組のことをなげなく話したことがきっかけとなり、ご先祖が吉宗の望遠鏡の筒を製作したということから、お逢いして話をきくことができた。明末の 1629 年に長崎にやってきて一閑張の業をはじめた飛来一閑（ひらいいっかん）は、2 代目に家職をひきつぐときに、千家がパトロンとなった茶道の一閑張を作る千家十職の飛来（ひき）家と、畠中家がパトロンとなった一般物を作る飛来一閑泉王子（ひらいいっかんせんおうし）家（以後、泉王子家とよぶ）に分かれる。ちなみに泉王子名は時の靈元天皇（在位 1663-1687）から賜り、幕府御用を務めた。両家の交流はゆえあってその後全く絶えることとなる。吉宗の望遠鏡の筒を製作したのは泉王子家 4 代目で、いまの尾上氏はその 14 代目ということである。先々代から先代へこの望遠鏡をさがしておられたが果たせず、今もそのあとを継いで探求されてきたのだという。岩橋善兵衛（1756-1811）の遠眼鏡の鏡筒を製作したのも泉王子家であった。番組製作にあたって NHK の取材班が訪れたのは飛来家で、当然のことながら有用な情報がえられなかった。ちなみに現在の第 16 代飛来一閑氏も、第 14 代泉王子尾上瑞宝氏も女性である。

そして 6 月 11 日午前、第 14 代家元瑞宝氏、第 15 代家元襲名予定の賢次氏をお連れして長崎歴史文化博物館内の橋本氏がオーナーであるレストラン銀嶺を訪問した。梅雨前線が

九州に停滞して大雨洪水警報がでているなか、所蔵者の大橋和隆氏は展示ケースから望遠鏡をとりだして、筒を伸ばして詳細に観察することを許可してくださった。これはあくまで前回のNHK番組の取材の縁と、今回の学術目的による復元計画の調査という目的があったからで、普段はケースからだされることはない。永年の懸案であったご先祖が製作された望遠鏡との対面にたいへん感激され、各部の一閑張製法について観察がなされた。さらに口伝でつたえられている11代目が行ったといういくつかの修復箇所についても、その位置が一致することを確認された。これは、現物を見る前に筆者がお聞きしていた筒を引き出して確認していただき、ぴったりその位置にほんのかすかな漆のもりあがり確認されたことで信憑性がある。



望遠鏡を前に、左から橋本和隆さん、筆者、尾上瑞宝さん

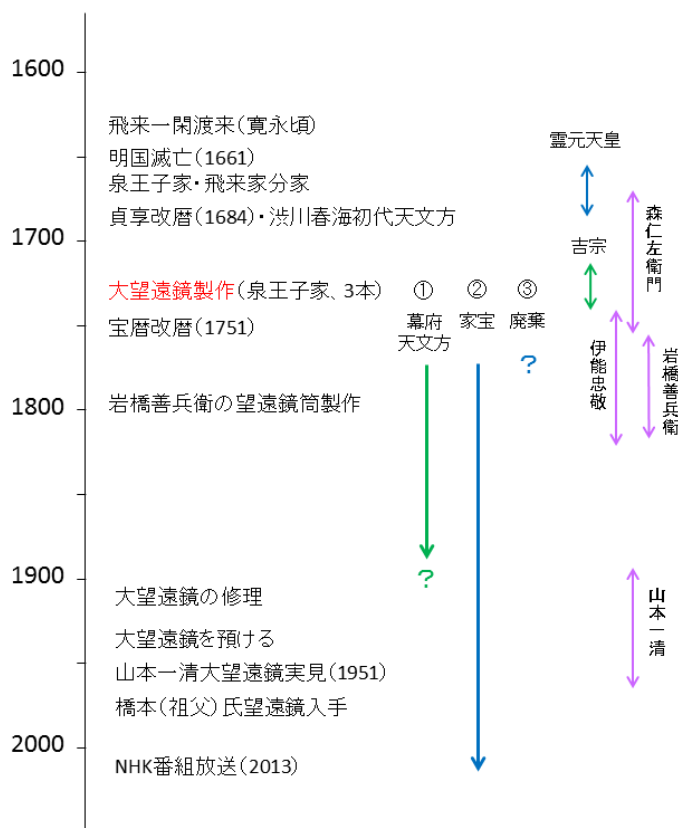
小一時間、望遠鏡を実見させていただいたあと、もとの展示ケースにおさめ記念写真など撮影して退出することになったところで、橋本さんが「じつは自宅にこの望遠鏡の格納ケースらしきものがあるのですが、近くですからおもしろいでしょうか」とおっしゃった。是非とお願いしていったんレストランを退出して、博物館の展示を見る事にした。もどってみると、島津家の大きな紋のはいった木箱の中に、もうひとつ箱が納められていた。その箱は上蓋が両側に開き、サイズの的にも望遠鏡がぴったり収まるものであった。表面に和紙をはって一閑張加工され、望遠鏡の筒と同じ文様が金箔でほどこされていた。先年の長崎水害のおりに蔵が水没してその中にあった箱は泥水をかぶり、傷みが激しく砂埃におおわれていた。島津紋の外箱は汚れもなく、被災後に手近にあった別物を仮の入れ物として用いたものである。



大望遠鏡の格納箱、痛みはひどいが一閑張が確認できる。右は上蓋を開いたところ。

尾上氏には長崎訪問の前に何度かお会いして、泉王子家の由来、望遠鏡のことについて詳しくお話をきいていた。口伝によるとくだんの望遠鏡は3本製作されたという。そのうちの一番出来のいいものが献上されたのだろう。では残る2本はというと、将軍家から製作依頼があったものを横流しすることはないから、処分されたものと考えられる。ところが泉王子家にはある時期この望遠鏡があったのである。上述の修理がなされたのもこの期間中のことであつたらしい。その後、家業がたちゆかなくなった12代目の時に望遠鏡をある人物にあずけた後に行方不明になってしまっていたとのこと。それが前述の山本一清の日記により、戦後しばらくたって京都の骨董商の店頭に出現したことになる。2本のうち1本は泉王子家に家宝として残されていたのかもしれない。となると新たに出現した格納箱に葵の御紋がないことなどから、長崎にあるのはかつて泉王子家に保管されていたものである可能性が高い。

貞享改暦の功により幕府天文方が創設され、渋川春海が初代天文方に就任したのが1684年のことであるから、吉宗の大望遠鏡も当然天文方の所轄として幕末までは保管されたであろう。たとえ紀州徳川家に伝わったとしてもその所蔵品の多くは明治期に散逸しており、望遠鏡もコレクターの手に渡った可能性がある。いずれにしても葵紋のつく化粧箱にはいった大望遠鏡が未だに見つかっていないということは、震災か空襲で焼失または海外に流出してしまったのかも知れない。



その後、尾上さんのほうでは折角の機会をいかして鏡筒の復元をされることになった。

これまでほとんど研究がされてこなかった文化財級の望遠鏡の復元研究ということで、筆者もさまざまな面から協力をおこなってゆくつもりである。

(2015年1月記、6月12月追記)